

新型コロナウイルス流行下における相談援助実習の教育効果

—形態の異なる2年度の実習の比較による検討—

○ 東北福祉大学 石附 敬 (6958)

清水 冬樹 (東北福祉大学・6541)、黒田 文 (東北福祉大学・2095)

〔キーワード〕 相談援助実習、新型コロナウイルス、教育効果

1. 研究目的

2020年より世界で流行した新型コロナウイルスの影響により、従来型のクライアントの生活場面に密接にかかわる現場実習の実施が困難となった。報告者が所属する東北福祉大学では社会福祉士課程の相談援助実習を例年4年次に実施しているが、2020年度は全面的に学内実習(23日間180時間以上の時間数と「職場実習」「職種実習」「ソーシャルワーク実習」の3つの段階で構成)¹⁾とし、2021年度は学内実習8日間(「職種実習」と「ソーシャルワーク実習」の一部を含む)と残りの期間を現場実習(「職場実習」と「ソーシャルワーク実習」中心)の混合型として実施した²⁾。

本研究では、コロナ禍に実施した両年度の実習に対する学生による自己評価の比較を通じて、非常時下実施した相談援助実習の教育効果について検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

両年度共に、Webアンケート調査を実施した。2020年度は学内実習に参加した学生210名を対象として12月に(回収数151、回収率73.9%)、2021年度は実習を終了した227名を対象として実習終了1か月後を目途に順次実施した(回収数126、回収率55.5%)。

研究の視点として、第1に全面学内実習と学内・現場の混合実習の学生への教育効果の違い、第2に学生の学びの自己評価、実習満足度や実習後の学びの意欲に関連する要因と、それらの関連性が実習形態によって異なるのかに焦点を当てた。両調査に共通する変数である、①実習から得た社会福祉の仕事へのイメージ、②学びの自己評価³⁾、③実習満足度、④ワークエンゲージメント(以下、WEと記す)⁴⁾を分析に用いた。分析方法として、①福祉の仕事へのイメージ、学びの自己評価(21項目の平均点)、実習満足度、WE(14項目の平均点)について、両年度の比較をt検定で実施した。②学びの自己評価21項目のうち、2020年度に「とても」と「ある程度」を含む「理解できた」と回答した人の割合が65%未満の8項目を相対的に評価の低い項目と設定し、2021年度の結果とカイ二乗検定により比較した。③年度別に、4つの変数の単相関をSpearmanの相関分析により求めた。

3. 倫理的配慮

両調査共に東北福祉大学研究倫理委員会の承認(RS210706)を得た後に実施した。本研究は共同研究であり、本要旨原稿内容について共同研究者の承諾を得て投稿している。

4. 研究結果

(1) 4変数の比較(表1)

福祉の仕事へのイメージ、学びの自己評価、実習満足度は、2021年度の方が統計的に有意な上昇がみられた。一方、WEには統計的に有意な差がみられなかった。

表1：実習評価に関する変数の分布と2年度の比較

変数（選択肢）	20年度(N=151)		21年度(N=126)		t検定
	M	SD	M	SD	
福祉の仕事へのイメージ（5段階）	3.93	0.67	4.22	0.84	**
学びの自己評価21項目（5段階）平均	3.69	0.55	4.03	0.56	***
実習満足度（5段階）	3.67	0.84	4.39	0.69	***
WE14項目（7段階）平均	2.81	0.98	2.69	1.07	NS

M=平均 SD=標準偏差 NS：統計的有意差なし * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

（2）学びの自己評価8項目の比較

6項目について「理解できた」と評価した人の割合が21年度の方が有意に高かった。「業務文書の記入内容・方法」が36pt、「円滑な人間関係の形成」25pt、「会議の運営方法」21pt、「就業規則」20pt、「地域の歴史や人口構造等」18pt、「プランニング」が10pt高かった。一方、「モニタリングと評価」、「利用者と家族の関係」は有意な差がみられなかった。

（3）年度別の4変数の単相関（表2）

両年度とも同様の傾向で4変数間の単相関がみられた。実習で社会福祉の仕事への肯定的なイメージを持てることは、学びの自己評価、実習満足度、WEとそれぞれ有意に正の相関を示していた。学びの自己評価が高いことは、実習満足度、WEとそれぞれ有意に正の相関を示していた。また、実習満足度が高いこともWEと正の相関を示していた。

表2：実習に対する各種評価間及びWEとの関連性

変数	年度	学びの自己評価		満足度		WE	
		相関 ^{a)}	検定 ^{b)}	相関 ^{a)}	検定 ^{c)}	相関 ^{a)}	検定 ^{c)}
社会福祉の仕事へのイメージ（5段階）	2020	0.43	**	0.44	**	0.37	**
	2021	0.48	**	0.54	**	0.25	**
学びの自己評価（21項目の平均）	2020	-	-	0.55	**	0.37	**
	2021	-	-	0.56	**	0.35	**
実習満足度（5段階）	2020	-	-	-	-	0.36	**
	2021	-	-	-	-	0.20	*

a) Spearmanの相関分析を実施 NS：統計的有意差なし * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

5. 考察

全面学内実習と混合型実習の比較では、福祉の仕事へのイメージ、学びの自己評価、実習満足度について混合型の方が高い効果を示していた。また、全面学内実習では低い評価であった学びの自己評価の項目の多くが、混合型では高い評価を示していた。これらの結果は、ソーシャルワークの現場で学ぶことの重要性を示すものである。今後はこれらの調査結果を通常期の実習と比較し、代替実習の教育効果の明確化と非常時下における効果的な実習方法について検討することが課題である。

文献

- 1) 東北福祉大学福祉実習支援室(2021)『令和二年度社会福祉援助技術実習(学内実習)評価活動報告書』.
- 2) 東北福祉大学福祉実習支援室(2022)『令和三年度社会福祉援助技術実習評価活動報告書』.
- 3) 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会(2015)『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト第2版』.
- 4) Tayama, J., Schaufeli, W., Shimazu, A., Tanaka, M. & Takahama, A. (2019). Validation of a Japanese version of the Work Engagement Scale for Students. Japanese Psychological Research, 61 (4),262-272.